

「郷土の偉人」にスポット

児童文学・小説・漫画の3点



洪水防ぐため岩山くりぬいた周藤弥兵衛

育成に結び付ける。

HNS研究所は、水処理装置な

の三点セットで紹介することで、活字離れが言われる子供たちに読書の機会を提供する。

郷土の偉人にスポット——。HNS（人間・自然・科学）研究所（島根県八雲村、小松昭夫社長）

（松江市、小松昭夫代表）は、江戸時代に四十二年かけて岩山を削成、社会貢献を担当している。活

周藤弥兵衛は出雲の国日吉村（現在の八雲村）の下郡（大庄屋）

人材育成の「刺激剤」

HNS研究所

小説・児童文学・漫画を出版

り、切り通しを開いた周藤弥兵衛 動の一環として地域の「人と水」

を紹介する小説、児童文学、漫画をテーマにした出版を続ける予定を同時に出版した。郷土のために、全国の自治体などに「郷土の生涯をささげた先人の足跡をたど 偉人」の再発見を働き掛ける。先

ることによって、町おこしや人材の活動を小説、児童文学、漫画

で、洪水を繰り返す意宇川の流れを変えるため、五十六歳から岩山をくりぬく作業に入り、一七四七年、九十七歳で切り通しを完成。菊池寛の「恩讐の彼方に」で知られる「青の洞門」に先立つ事業と

される。本の価格は小説千四百円、児童文学と漫画がそれぞれ千三百円。

（日本経済新聞 H7.4.19）

激動する市場経済

押し寄せる産業や国化、商品化と環境問題、急変する価値観、従来の成長経済の構造そのものが今、まさに崩壊しつつあります。

日本経済、企業の先行きは？

企業、行政、学校に新たな役割が求められています。利益追求の企業活動による付加価値の時代から人間・自然・科学の新しいかがわを見直し、本物の価値の創造をするときではないでしょうか。

江戸時代の農村指導者二宮尊徳翁は、私達に新たな時代のあるべき理念を教えてください。

理念なき経済は悲劇である。経済のともなわぬ理念はたわごとである。『一家を興し、万家を興す』

そこで、私達は、御時代表を切り拓くため、企業・行政・学校の協力のもと、御事業を生み出す体としてHNS「ニュー・マシナイズイナ・サステナブル」研究所を設けたいとしました。



HNS

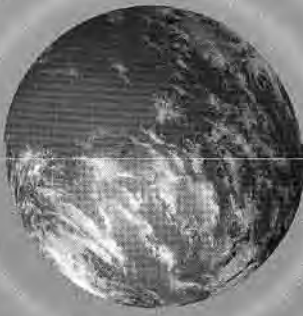
すべての企画に共通する基本的手段は？

人・水・食・住・衣・住と人間に囲われる世界に新しい価値を創造する。

出版活動。そして...

各地域共通の事業
出版記念シンポジウム開催
出版・児童文学小説の発行

村一志運動



小さな村が、世界をおおう。

ローカルがグローバル

新しい時代をめざして、高い志のネットワークの創造！

私達は、この運動を全国に広げるため、共感のできる方々とあなたの郷土の「太兵衛」に光を当てる活動を始めたいと考えています。このような取組の趣旨にご賛同くださる方々の積極的なご支援をお待ちしています。この事業を、良き輪に、高い志と共感のネットワークを、全国に、全世界に広げようではありませんか。また、HNS研究所は、この事業を基盤制度によって運営することを考えており、関係法人の設立を検討中です。この趣旨をよくご理解いただき、ご賛同いただける方々のご意見、お問い合わせをお待ちしております。



私達は、人類の未来のために、いかなる役割を果たすべきか、歴史の中に模索する。この運動は、郷土の人々の知識と生活のために生涯を捧げた偉大な先人への敬意を、現代に蘇らせ、その足跡をたどることによって未来への道筋を発見する。そのような先人の生涯を、児童文学、小説、出版活動を通して日本全国の市町村に広く紹介し、それをかき取りに一連の事業展開をめざします。

清原太兵衛翁の偉業に学ぶ 鹿島町長 山本清澄 (清原太兵衛翁会)

古来、出雲の国・大田・斐伊川は、西に流れて大津湾に注いでいました。ところが、今からおよそ300年前、松江藩主松平直政公府の直後の寛永16年(1639)の大洪水で流れてしまわれた。東の穴道湖へ注ぐようになり、松江城下は浸水、水害に悩まされ続けていました。松江藩の神官方が体得となった清原太兵衛翁は、一生の悲願として穴道湖開きを志し、藩に許可を願い出る事。前後2回、1785年(天明5年)3月、74歳で若し、苦難の工事3年、身命を賭して大工事を完成しました。太兵衛翁は開き目前に没しました。穴道湖の開きによって穴道湖周辺の水害が緩和され、新田が開墾されることにも、松江藩領に新たな発展がもたらされました。今日の鹿島町の産業経済の発展の礎となった功績は大なるものがあります。鹿島町合併40周年の記念事業として「清原太兵衛翁の偉い志」を顕彰することによって、今後の発展の道筋を学び未来に生かすことを願っています。



佐陀川開削に尽力「清原太兵衛」



応募小説
児童文学
マンガ

3冊セット 鹿島町が出版

郷土の偉人
もって知って 全戸に無料配布

鹿島町が、同町内の佐陀川開削に身をまきた「清原太兵衛」をテーマに懸賞募集した小説が、このほど出版された。小説に併せて「清原太兵衛」の児童文学とマンガも刊行され、三冊セットで全戸配布。町では「郷土を開拓した偉人の業績を大人から子供まで知ってもらいたい」と話している。

小説は昨年、町合併四十周年記念事業として一般から募集。昨年七月から十二月までに全国各地から九人が応募した。作品を島根短大の藤岡大拙学長らが審査。最終選考に残った四編の中から、小説としての面白さや歴史的な資料を十分に生かした内容などから、松江市東本町の寺井敏夫さん（65）の「A島根県共済農業協同組合連合会専務」の作品が選ばれた。

小説はA5判、百九十二ページ。江戸中期、清原太兵衛が水害に悩む松江城下を見て水路の開削を決意。宍道川と佐陀川を結ぶ水路の業績が、だれにでも分かる表現で描かれている。この小説に併せて町では、将来を担う若い世代にも先人の偉業を知ってもらおうと、マンガ（小室孝太郎作）と児童文学（村尾靖子作、高田勲挿絵）も刊行。三冊セットで町内の全世帯二千四百六十一戸と、学校や公民館などに無料配布した。



人気上々の 清原太兵衛伝

佐陀川開削に活躍

郷土見つめる機会に

松江の書店 5週連続「ベスト10」

発行所は、県内の地元「めざまし」で、徐々に人気が一店から二店、三店へと広がっている。松江市の書店「ベスト10」に十回から五週連続で名を連ねる。書店関係者は「中・高生を中心に読まれている。郷土をあらためて見つめ直す機会」と評価している。

大連湖と日本海を結ぶ佐陀川開削に身をまきた清原太兵衛の生涯を描いた伝記本が、地元の鹿島町や松江市で人気を呼んでいる。松江市内の書店の人気ベスト10に十回から五週連続で名を連ねる。書店関係者は「中・高生を中心に読まれている。郷土をあらためて見つめ直す機会」と評価している。

清原太兵衛は、江戸中期に宍道湖北と鹿島町側の日本海を結ぶ水路の開削工事に生涯を捧げた人物。町合併四十周年を迎えた鹿島町が懸賞募集した小説に加え、漫画、児童文学の三冊作をそろえて出版した。松江市などでは同氏が書店を通じ十月から販売を始めた。

郷土の偉人伝記として静かな人気を呼んでいる「清原太兵衛」

(山陰中央新報 H9.12.4)

(山陰中央新報 H9.10.8)



清原太兵衛ゆかりの佐太神社にて
(現地説明会)



読書感想文表彰式



シンポジウム・パネリスト



基調講演：
藤岡大拙 島根女子短大学長

◎清原太兵衛顕彰出版記念事業『記録集』より

はじめに

湖岸から望む穴道湖の夕景は、幻想的な雰囲気をつただよわせて、絵のように美しい。訪れる旅人たちは、出雲の国の原風景に出会い、思わず感嘆の声を発するのである。景色ばかりではない。穴道湖は「穴道湖七珍」でも知られるように、味覚の宝庫である。だが、今はおだやかに水をたたえる湖も、かつて寛永年間（江戸初期）の大洪水で、出雲の大河「斐伊川」が流れを変えてから氾濫を繰り返すようになり、沿岸の村や町を洪水の渦で巻き込んだ歴史をもっている。

車で松江温泉を西に湖岸線を走ると、やがて浜佐田の新茶屋前橋に差しかかる。北に真っ直ぐに伸びている川がある。すぐそれが人工のものであることがわかる。穴道湖から日本海（恵曇）に通じた「佐陀川」、「清原太兵衛」が心血を注いで開削したものである。この開削によって、積年の水禍を免れ、鹿島、松江をはじめ沿岸の諸地域の産業経済文化が発展してきた。しかし、この治績は、とかく忘れられ勝ちであった。

鹿島町は、平成8年に合併40周年の記念すべき年を迎えられ、記念事業として『清原太兵衛翁の高い志』を顕彰することによって、今後の発展の道筋を学び未来に生かすことを願って顕彰出版を企画された。

この企画にあたって、『郷土の人々の環境と生活のために生涯を捧げた偉大な先人にスポットを当て現代に甦らせ、その足跡をたどることで未来への道筋を発見する。』一村一志運動の提唱者小松昭夫氏が主宰するHNS（人間・自然・科学）研究所に委託され、漫画・児童文学・小説の3部作として出版された。

小室孝太郎氏（漫画）、村尾靖子氏（児童文学）の両作家に執筆が依頼された。また、小説は、懸賞小説として公募したところ、現地見学会など開催する中で、北は北海道、南は九州の各地から関心を寄せられた。応募作品の中から、寺井敏夫氏の作品が最優秀賞に輝き出版の運びになった。

その後、清原太兵衛顕彰会では、「清原太兵衛シンポジウム」を開催され、広く太兵衛翁の治績の顕彰と偉業の継承に努められた。その一環として小中学生の読書感想文を募集されたところ、339編の応募があり一部をここに収録した。

今、小中学生の問題がクローズアップされている。「さめている」「きれっている」「表情がない」など、さまざまな言葉で指摘され、「心の教育」が叫ばれながら問題は深刻化している。しかし、この子供たちの感想文を読み、「素直に感動している子供たち、自分の夢をふくらませている子供たち、何をなすべきか模索する子供たち」に驚きと期待を抱かずにはいられない。大人が何をなすべきか問われている。

本書は、この一連の活動の記録集である。熟読いただき各地でこのような試みの輪が広がることを期待してやまない。

平成10年5月1日

清原太兵衛顕彰事業、懸賞小説審査委員長

藤岡大拙（島根県立女子短期大学学長）

清原太兵衛顕彰会が鹿島町内の小学生、中学生を対象に清原太兵衛の本を読んだ後での読書感想文を募集したところ、339編の応募がありました。

審査の結果、最優秀賞に3名（小学校低学年の部・高学年の部・中学生の部各1名）が入賞。ここに最優秀賞の感想文を掲載いたします。

□「清原太兵衛」を読んで

東小学校3年 木村愛実

わたしが清原太兵衛という人を知ったのは、鹿島町の社会科の副読本を読んだ時でした。

はじめは、川を作った人であるということだけしかわかりませんでした。でも、この本を読んでではじめていろいろなことを知りました。

佐陀川は、雨がふったときは水がにごり、水かさがふえ流れがはやくなり、流されていきそうです。わたしがいつも見ているそんな佐陀川が、人の手で作られたなんて、ふしぎでした。川はしぜんにできたものだ、と思っていたからです。それが、何百年もむかしに、人の力で作られたなんて信じられません。

今のように、大がたダンプカーやクレーン車のない時代に、人の力だけでできるなんてすごいと思います。

わたしが一番心にのこったのは、自分の体のことよりも、人のことを心配して、川を作りたいと太兵衛さんが思ったところです。思いやりがある人だったんだなあと思いました。

それに、小さいころからのゆめを、あきらめないなんて、すごいと思いました。今、わたしにも、ゆめがありますが、大人になってもそのゆめをもっていられるか、自しんがありません。

太兵衛さんが工事をはじめられたのは、74才になってからだそうです。いやなことがあってもくじけずに、小さいときからずっと考えていたことを実行したのです。

何度も何度も反対する村の人たちに、せっかくうったくいをぬかれて、大へんだったんだろうなあと思います。太兵衛さんはくいをぬかれないようにするために、頭をつかい、村の人たちがねむっているあいだに、くいうちは終わったそうです。わたしは、太兵衛さんはいつねむったのかなと思いました。

川ぞこをほるさぎょうは、頭の中で考えていたこととは大ちがいで、かなりむずかしそうでした。

太兵衛さんは、朝のまだうすぐらいころから江角の海岸へ行って、つめたい海の中に入り、体を清めたそうです。つめたくて、こごえ死にそうだったことでしょう。太兵衛さんは、じっとだまって入ったそうです。わたしは、つらい思いを何度もしたんだなあと思いました。

1787年の秋の終わりごろに、佐陀川はかんせいしました。よろこんでいる人々の声が聞こえるようで、わたしもうれしくなりました。

わたしは、太兵衛さんの本を読んで、いろいろなことを知りました。その知ったことは、今では考えられないことばかりでした。

友達のうちに遊びに行くときにいつも見る佐陀川は、よくごみがういています。

この佐陀川はたくさんの人の力と苦労のおかげで作られたことを思い、わたしたちは、この川をよごさないように、川を大切にしていかなければならないと思います。

□ありがとう！清原太兵衛さん

恵曇小学校4年 坂本優希

私が住んでいる町は、太兵衛さんが作ってくれた佐陀川の近くの古浦です。川には、みなと橋がかかり、古浦と恵曇の町を結んでいます。私たちが松江に用がある時は、佐陀川をながめながら横の道を通って行きます。

4年生になって、社会科で太兵衛さんの事を習いました。いつも見ていた佐陀川が太兵衛さんの作った川だと知ってビックリしました。あんなに長くて大きい川がどうしてできたのか、知りたくなりました。本を読んだり、佐陀川見学にも行きました。太兵衛橋や太兵衛きねんひなどいろいろなものを見ました。そして、私は、太兵衛さんてすごい人だったんだなぁと思いました。

昔、穴道湖の水が大雨がふるたびにあふれ、大きなひがいが出ているのを見て、「ぼくがこう水をなくしてやる。」

と、小さいのに国を救おう!!と考えるなんて私にはそうぞうがつきません。私だったら、こんなこう水とかがあっても人がするからいいや、と思うにちがいありません。でも太兵衛さんはちがいました。どうしたらこう水がなくなるかずっと考えて、何回も工事願書を出して、12回目でやっと願いがかなったのです。一度思った事は、かなうまであきらめない太兵衛さんの気持ち、私もそんな強い心がほしいです。

工事がはじまって、うなだと、かたの内のところはどしゃがくずれて、作業をしていた人たちがどろにのまれてたくさんなくなりました。

その時も太兵衛さんはあきらめず、お百度まいりをして工事がぶじに終わるように祈りました。佐太神社のたたりだと言われても、まけないでがんばった太兵衛さんって、本当にすばらしいと思います。

太兵衛さんのことを知るまで、私は、佐陀川をただなんとなく、見ていました。でも太兵衛さんや工事をいっしょうけんめいにした人たちについて勉強をして、今までとはちがう川のように見えてきました。いろんな人のくろうを合わせてできた川、佐陀川。私たちのくらしを便利でゆたかにしてくれる川です。

私も、太兵衛さんのように、次の時代によろこばれる何かをしたいと思います。その何かはまだ分からないけど、たくさんの勉強をしたり、いろんなことにちょうせんして、みつけていきたいと思います。

ありがとう清原太兵衛さん。

そしてずっと私たちを見守っていて下さい。

□清原太兵衛について

鹿島中学校3年 安達洋子

私はあまり佐陀川に縁がなく、家も近くないし、学校の登下校の道も川の近くを通りません。だから、この川を見るのは学校の音楽室と、松江市内へ行く時だけです。

私は、その音楽室から見える景色がとても好きです。そこからは、校庭に立ち並

ぶ桜の木と、その背後にどっしりとかまえた佐陀川が見えます。この川を高い所から見下ろすととても大きく、とても広く見え、とても穏やかな気持ちになります。

春は桜が咲き匂い、花卉は川の方へと散っていきます。佐陀川は、花卉だけではなく、桜そのものを飲み込んでしまうような、そんな迫力さえ感じさせます。そういう風を感じるのは、やはり、清原太兵衛と、太兵衛の率いた作業者達の川への強い思いがあったからだと思います。

この佐陀川をつくった、清原太兵衛という人の名前は、小さい頃から学校や家で何度も聞かされていて知ってはいましたが、太兵衛の生涯については何一つ知りませんでした。興味すらわかず、ずっとこのまま名前だけのおじいさんで終わるところでした。

しかし、今は違います。太兵衛の夢や人生、考えを知ってから、私にとって憧れの人のような存在になりました。

太兵衛には、幼少の頃から夢がありました。洪水から村を守ることです。太兵衛の住んでいた村は、毎年暴風雨に襲われ、嵐の過ぎ去った後はひどいものだったそうです。いたるところに転がっている家畜の死がい。鼻をつくにおい。病に倒れる人。大きなどろ水の川となってしまった村。そんな時倒れた父。太兵衛の目に映るのは、暗く悲しいことばかりでした。

だから、もう二度とそんな風景を見なくてすむように、という思いがこの夢にはあると思います。そして、この夢を決して忘れることなく、寝る間も惜しんでひたすらその一つの夢を追いかけていた太兵衛の姿勢を知り、自分も夢をあきらめたらいけないなと思いました。どんなに無理だと思うことでも、その夢のために毎日こつこつとがんばれば、いつか、清原太兵衛のようにおじいさんになってからでも、きっとかなうんだというような気持ちになりました。

もちろんその夢をかなえるためには、いろいろと苦しんだりする時期もあると思います。太兵衛も、付近の住民の抵抗や土質の悪さ等多くの問題にぶちあたり、何度も克服して、そして川をつくりました。時には、一緒に戦った作業者の命を失うこともありました。それでも夢をあきらめなかったこと、そういう人が、かつてここに存在したということが、私にはとてもはげみになります。

私には、まだ年齢的にも若いということもありますが、ただ一つの何かのために、苦しんだり泣いたり、危ない橋を渡ろうと思ったこともありません。それに、これからの人生で、自分を捨てて必死になるということが無いというのも嫌です。間近で見ても、テレビで見ても、何かのために必死になっている人は、とても素敵だと思います。そして、必死になった分だけ、その分だけ結果を残しています。清原太兵衛は、とても長くて大きな川を残しました。それは今になっても多くの人達に使われ、役立っています。

清原太兵衛がいたから、今この町で米が作られ、清原太兵衛がいたから、今水害で悩むこともありません。もしいなかったら。そう考えると、この人は私達の恩人です。

今、私には夢があります。その夢はまだまだ遠くて、細かいところでいろいろと迷っています。でも、清原太兵衛のように、あせらず、ゆっくりと考えていこうと思います。